

“水の都・富山の船遊び”を生む

～中村孝一さん～

富山市 松川遊覧船



日本のベネチア、富山を熱っぽく語る中村さん



咲きほころソメイヨシノのアーチをくぐり下る遊覧船



『荒城の月』が流れる清流、松川に新しい風情が誕生

富山市の中心部を流れる松川に、4月から観光船が運航し、水上からの花見などで大にぎわいとなっている。

この水上遊覧船の生みの親が、月刊“グッドラックとやま”を主宰する中村孝一さん（43才）である。

事の起りきは、5年前にさかのぼる。「魅力ある富山をつくる」と題したタウン誌の座談会の席で、あまりにも貧弱な富山の魅力を、市民によって素敵なものにしよう、という気運になった事がきっかけという。

それから、中村さんの富山の魅力さがしが始まり、結局は、水の豊富なこと、きれいな水がポイントとなり、“水の都、富山の船遊び”という珍しいアイデアが考えだされた。

マスコミへのPRは無論、県や市へも富山のイメージアップ作戦を訴え続けた。また、自らも、水郷の潮来(茨木県)や柳川(福岡県)を訪ねるなど、東奔西走の日々であったという。

さらには、作曲家、滝廉太郎が富山で幼年期をすごした事から、名曲“荒城の月”を船着場に流し、より強く印象づけるよう工夫もこらした。

この熱意が、市民、地元企業の賛同を得、役所の支援もあり、この4月に実現したという。

川面をゆったりと上り下りする船を見つめる中村さんは、「水上チューリップフェアや、夏の灯籠流しのイベントも組んで、維持定着をさせたい」と目を輝かせて語る。

春風の中、はてなきロマンを追い求める男の肩に、応援するかのごとく花吹雪が、舞いちっていた。